発行日：令和6年９月24日
編集・発行：中央有隣学院広報委員
〒459-8001 名古屋市緑区大高台二丁目1718

社会福祉法人中央有鄰学院 広報誌

となりにいるよ vol.40

2024.09
vol. 40

ゆうりん

家族をおもう

家族の成り立ちは本当に様々で、安全ではない、安心ではなかったその環境の中で子どもの育ちがありこれまでの人生があります。子どもが悪くて施設入所に至るケースは殆どありません。それでも子どもたちは「ぼく（わたし）が悪い子だったからさ」と入所の理由を語ります。ゆうりんでは施設入所の際、入所に至った理由に“あなたは悪くないよ”と整理をして受け入れをします。悪いと思ったままだと、親が会いに来ないのは自分のせいだ、と自分を責め続ける人生になるからです。「そっか、ぼくは悪くないのか」と親と離れて暮らす理由を明らかにすることで、施設生活を前向きにとらえることができるのです。一方で、日常生活を笑顔いっぱいで暮らす子どもたちもひとたび社会に出れば幼稚園や学校で友だち親子の姿を目にする機会は多く、その度に家族を思い出し自分の置かれている状況を目の当たりにさせられます。「ママと暮らしたい」と小さな体で願いながら生活をしています。

支援を始めた当初の親支援は衣食住の環境設定が中心でしたが環境だけ整えてもうまくいくことはありませんでした。親子がもう一度一緒に暮らすためには親のケアが必要だと気が付きました。なんでこうなっちゃったんだろう？と頭を抱えている親が多い。実は、親もその親から不適切な関りの中で育てられていることがほとんどなのです。面会当日、連絡なくドタキャンで電話をしても出ない親がいます。

ある先生に言われました。“お母さん、子どもに会えない何か理由があるんだね”と。電話に出ないのは責められると思うから。きっとこれまでも何度も責められる体験をしてきたのでしょう。

ある日、電話が繋がらなかった理由を聞いてみたら、「実はさ、面会中に子どもになんで一緒に暮らせないの？って聞かれるのが怖かったんだよね」と教えてくれました。その言葉を聞いてから親の生い立ちに目を向けて、我が子と対面できないくらいのどんな人生があったのかを聞き想像するようになりました。そうすると「それは大変だったな」という共感の気持ちになるのです。子どもと親で抱える悩みがちがう、支える側と親の見ている世界がまったく違うなどそれぞれのニーズが異なると家族の再統合は難しい。“ぼく・わたしは悪くないし、ママもパパも悪くない。そうならざるを得なかった環境に原因があるね”と、まずはこうなったのは誰のせいでもないことを伝えながら家族支援をします。人間誰しも間違いはあるし、困難にぶつかった時は誰かに寄り添って欲しいと思います。

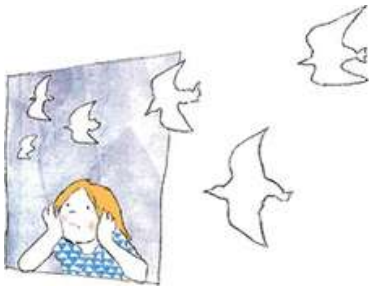
ゆうりんがいつも大海原で彷徨う親子を温かく照らす灯台でいられるように、ここに辿り着いたらもう大丈夫だ、と思われるように、この先も“だいじょうぶ。いつもとなりにいるよ”と声を掛け寄り添うことができる施設でありたいなぁと思っています。

（家庭支援専門相談員　山内）

2010年にほだかが開設して15年目になります。生後間もない新生児～3歳くらいの幼児まで、様々な家庭の事情を抱えた子どもたちが、変わらず元気に過ごしています。この15年の間に変わったこととして、ほだかを卒院したあとゆうりんへお引越しする子どもの数が大きく減りました。家庭復帰する子どもと、里親さん宅へお世話になる子どもの数が増えたからです。特に里親さん宅へ行く子どもの数の割合は着実に増えていて、2013年前後は退所児全体に占める里親さん宅へのお引越しは0～15％で推移していましたが、2018年以降は35～56％となっています。ほだかでも、里親さんの養育現場への受入れや交流中のサポートなど、子どもが里親さんと関係をつくり、安心して新しいお家へ向かえるよう、職員一人ひとりが丁寧に対応しています。子どもたちが乳児院で生活するのは、どれだけ長くても3年程度。ほだかから、その先何十年もある長い人生を共に過ごす里親さんへ、感謝と敬意をもって大切な命を託します。

（ほだか施設長　北根）

きょうわ



きょうわのアフター支援　～退所後の行く先～

きょうわに入所した子どもはそれぞれのタイミングで退所していきます。基本的に15歳以上でないと入所できないため、児童養護施設と比べると在院期間は短く感じるかもしれません。退所のタイミングは卒業や進学であったり、自立の目処が立ってきて迎えた誕生日であったり、自ら一人暮らしを希望しての退所であったり、はたまた落ち着いて生活できず児相の判断で退所が決まったり・・・。入所してから数か月で退所していく子もいれば、6年間きょうわで生活していた子もいます。(現在の最長記録です！)
さて、今回はそんな退所児らが現在どうしているかを数人ピックアップしてお伝えしたいと思います。

短大進学に合わせて退所したAさんは、現在3年次からの大学編入を目指して勉強に励んでいます。入所中は退所が近づいて行く中で引きこもりがちになっていましたが、短大では友人ができ、アルバイトもがんばりながら社交的なキャンパスライフを楽しんでいるようです。お金のやりくりに課題があるため職員はドキドキしながら見守っています。

20歳を迎え就労自立で退所したBさんは、残念ながら仕事が長続きしない状況でした。そんな折、自立援助ホームの制度が変わり入所の年齢上限が撤廃されました。退所後も職員が役所や職場の手続きに同行したり、本人もきょうわに泊まりにきたりと交流が続く中でもう一度入所して心機一転やり直したいという本人の意志があり、児相も交えて協議し今年の5月から再入所となりました。きょうわでアルバイトしながらやり直しを頑張っています。

Cさんは手先が器用で料理が得意な男の子です。きょうわ入所中もお寿司屋さんでアルバイトをしていました。ただ、バイトに行くようになったと思ったら急に行けなくなったということを繰り返しており、バイト先も本人もとても悩んでいました。児相の担当ケースワーカーさんが紹介してくださった子ども・若者総合相談センターさんと繋がり、入所中から面談を重ね、退所後は職業体験プログラムのマッチングで短時間の体験から始めた和食屋さんで働くことに。自信がついたのか、現在かけもちをしながらアルバイトをしています。退所後も時たまきょうわに泊まりに来ますが、和食屋さんではうなぎの串うちを任されるようになったと嬉しそうに話してくれました。

3名ピックアップしましたが、きょうわを退所した子はまだまだたくさんいます。順調に生活している子もいますが、中にはつまずいてしまう子も。そんな子たちのことも見落とさないよう、定期的に連絡を取ったり一緒にごはんを食べに行ったり、きょうわに来てもらったりしながら困っていることがないかを聞いています。入所児も退所児も元気に過ごしてくれるよう、職員一同サポートしていきます。（新村）

ふれあいセンターおおだか

今年の夏も猛暑日が続き、酷暑になる日も多く厳しい夏でした。週3日の水遊びも楽しみに通ってくださいました。又、プランタに植えたトマトが実を付けると毎日親子でながめながら、「赤くなったら食べられるよ」と話している様子を目にしました。子どもが、目の前にある物に興味や関心を示した時、大人も気付き共感し合える関係が素敵だなと思いました。

２年前から利用されるお子さんの月齢が低年齢化してきています。育児休暇中の親が増えていることもあります。出産から1年～2年の間に保育所に預け仕事復帰するという方もみえます。以前は上の子と一緒に下の子を連れて利用される場合、

月齢の小さいお子さんを見ることはありましたが、今は育児休暇中の母親が、親子で遊べる場所はないかとホームページや広報紙を見て訪れる親子も増えていることの一つかもしれません。

そして、3歳になった翌月から満３歳児クラスに入園させる家庭も増えてきているのも事実です。３歳になっても次の年の３月31日までは、支援センターを利用してくださっていた現状が、今では次々と入園を希望されており、２歳児の利用が少なくなっていく原因とも言えます。支援センターでも２歳児になってくると、来年度を見据えてプレ幼稚園、プレ保育といって準備を進めていかれます。情報収集や情報交換も頻繁に行われていました。支援センターも幼稚園、保育園に通うOB・OGの親から話を聞く機会を設けたり、情報収集を行うなど数年前から取り組んでいます。これからも多くの利用者さんに情報交換や情報共有の場として有効に利用していただきたいと思います。（丹羽）

厨房だより

今年の8月4日に、イタリア昼食会がコロナ禍を経て5年ぶりの開催となりました。ゆうりん、ほだか、きょうわ、卒院生とたくさんの子どもたちが集まり参加しました。シェフの皆様が子どもたちのために、素晴らしい料理をゆうりんの厨房で調理し、振舞ってくださいました。この会は25年前の大舎の頃からはじまり、小舎になった今でも繋がりを持ち続けていただいています。そして、お越しいただいたシェフの皆さんは子どもたちの成長を何よりも楽しみにして下さっています。今では大人になった卒院生を幼児の頃から知っていてくださる大切な存在です。今回のように特別な料理や空間の中で食事をすること、食べたいものをリクエストすること、楽しい時間を一緒に過ごすことなど、一つ一つの経験が社会に巣立っていく子どもたちの糧になればと思います。（早川）

妊産婦等生活援助事業　「あん」

乳児院ほだかの新たな取り組みとして、妊産婦の生活支援を開始しています。
ゆうりんの空いた小舎を産前産後の母親が快適に生活できるよう改善し、新生児の対応に必要なものも整えました。まずは名称をどうするかで、ほだか職員全員から案を募り、その中から「あん」に決定いたしました。『“安”心・“安”全・“安”産』の「あん」、また、五十音順の初めの文字“あ”と終わりの文字“ん”にちなみ、最初から最後までお手伝いをしていきたい、という想いが込められています。
先に取り組んでいる他施設の見学や、産前産後ケアを行っている団体から話を聞きつつ、ほだか独自で取り組める内容も検討しながら準備を進めていた矢先、ゆうりん卒院生の“お試し利用”の話を頂きました。ゆうりん卒院生ということもあり、顔見知りの職員がいるため、利用者本人も最初からリラックスしている状態で、職員への甘え方も上手く、新生児を連れての母子での宿泊でしたが、1～10までお世話をする形となりました。
ほだか職員も初めての取り組みということもあり、最初はすべてをお手伝いしている状況が続きました。《“里帰り”できる場所》を提供したいと思っていましたが、この“お試し利用”を機に、利用者の甘えを程よく聞き入れながらも、親子で生活できるすべを伝えていく必要性も強く感じました。まだまだこれからたくさんの話し合いを経て、より良い事業に発展させていきたいと思います。
今回ゆうりん卒院生が利用してくださったことで学べた事がたくさんあります。なにより、ゆうりん卒院生の、「みんなでご飯を食べることが楽しい」という一言がありがたく、このような支援ができたことに心から嬉しく思います。そしてこの先も、「あん」と出会えてよかった。「産んでよかった」と思っていただけるような取り組みを目指していきたいと思います。　（山本）

里親家庭支援センター　ほだかの里

今年も『有鄰学院山小屋あおむし』で子どもキャンプを開催しました。親と離れて初めてのお泊りで、「おかあさぁ～ん」と泣けてしまう子もいましたが、山小屋あおむしでの生活と大自然の清流を目いっぱい楽しむことができました。このあおむしでのキャンプが子どもたちにとって、この夏の最高の想い出となり、この先にあるかえがえのない絆へのきっかけとなれば幸いです。（宗吉）

子ども食堂「もりカフェ」が1周年を迎えました

子ども食堂「もりカフェ」は、令和5年5月からスタートし約1年が経ちました。場所は、有鄰学院からほど近い“森の里団地の東集会所”で、毎週木曜日の18:00～20:00にカレーや丼物、うどん、季節の行事食等様々なメニューを提供しています。来所される方には会員証を発行しており、初めての方には会員登録をお願いしています。登録者数は毎月増え続け、今では500名を超えています。年齢層は幅広く、子どもから高齢者まで毎回130名を超える方が食事をしていかれます。繰り返し利用される家庭や子どもも多数あり、もりカフェが地域の方の居場所にもなってきていると感じています。調理している時間帯から子どもたちが集まり、職員と談笑したり遊んだりする姿もあります。また、ゆうりんの卒院児も顔を見せる事があり、毎回とても賑やかです。最近では、社協や子ども食堂ネットワーク、地元の企業様からも注目をいただいており食糧や物資等様々な支援をいただいています。

これからも毎週継続し続けることで、地域の皆さんにとって「となりにいる存在」となれるように頑張っていきたいと思います。中央有鄰学院で行われている子どもへの支援のノウハウは地域全体へ還元できることが多くありますし、子ども食堂「もりカフェ」が地域の方々と社会で育てるシステム、風土作りのモデルとなればと考えています。お時間のある方はぜひ食べに来て下さい。（洞下）

児童自立援助事業Ⅱ型が始まりました

児童養護施設出身の子どもたちは後ろ盾がないことが多く、自立後も生活が立ちいかなくなったり孤立化してしまったりすることが課題になっていました。そういった背景があり、ゆうりんでは卒院後も“となりにいるよ”という想いで予算が出ない中でも卒院生たちとアフター支援で繋がり続けてきましたが、この度、児童福祉法の改正により、これまで20歳や22歳で自立を強いられてきた子どもたちが、かつて入所していた児童養護施設でも自立支援を受けられるようになり、ゆうりんでも自立援助事業Ⅱ型を始めることとなりました。

基本的には、自立援助ホームきょうわのような自立援助事業の業務とほぼ同じく、対象の子どもの進学・就労支援や通院・役所の同行支援、生活支援を中心に前向きに生活していけるようサポートしていきます。定員は4名で、対象の子どもたちはゆうりんが契約するアパートにそれぞれ入居していることや食事提供の方法など、異なる部分もあります。正直まだまだ手探りの状態ですが、定期的に皆で食事を摂る機会を設けるなど大変な思いをした子どもたちが少しでも温かさや心地よさを感じられるような環境作りを心掛けたいと思います。（矢掛）

私たちが担当します！

中央有鄰学院職員紹介

ゆうりん　加藤　智子

平成26年に入職し、昨年まで乳児院ほだかに勤務していました。これまでも同じ中央有鄰学院の看護師として大きな怪我や感染症などの時は情報を共有し医療、看護相談しながら関わってまいりましたが、今年度より児童養護施設にも看護職の枠が設けられたため、意を決して異動願を出し、ゆうりんでお世話になることになりました。

ゆうりんでは服用薬が必要な児が多く、服薬管理の必要性を強く感じ、まずは職員が「どんな薬効のお薬か」「いつまで服用が必要か」等が一目で分かるように『お薬ファイル』を作成して運用を開始しました。まだまだ「お薬ファイル」を確認するということが習慣化されていないところもあり、現場の方々の意見をお聞きし、改善点を見つけて誤薬、服薬忘れがない様に活用していきたいです。将来的には子ども自身が内服の必要性を理解し、自身の身体や健康に少しでも関心を持ってもらえるツールの一つになればと思っています。私自身ゆうりんの生活に慣れていないところがありますが、職員、入所児の皆さんの安心安全な環境と心身の健康に少しでも貢献できればと思っています。

ゆうりん　内田　拓海

Q：本園優での生活と地域小規模ゆうでの生活を経験されていますが、どんな違いがありますか

地域と関わる機会が増えたことです。本園優の時は、地域の方とは挨拶をする程度でしたが、地域小規模に移動してからは、子どもたちの分団を見送った後や授業参観などでお会いした時に、世間話など他愛もない会話をする機会が増えました。子どもたちも、子ども会などの地域の集まりに参加することで、地域の子どもたちとの交友関係が広がっているようにも感じます。
また、時間のゆとりも持てるようになりました。時間に余裕が持てると、子どもたちと一緒に公園に遊びに行ったり、テレビやゲームをしたりと子どもたちと関われる時間が増えました。

Q：昨年度1か月間育休を取得されていましたが、今後育休を取得される職員さんにメッセージをお願いします

育休を取って、思ったこととして、子どもの成長は本当にあっという間で、毎日が驚くことばかりだったことです。笑ったり、泣いたりと子どもの色々な表情を見ることができました。お宮参りなどのイベント事にも参加することができて、子どもとの1分1秒がとても大切でかけがえのないことを実感しました。ゆうりんは育休がとても取りやすい職場です。育休を考えているのであれば必ず取るべきだと思います。

Q：ズバリ！ゆうりんの好きなところを教えてください

子どもたちが活気に溢れていて、毎日が賑やかなところです。小さい子から大きい子まで、個性豊かで、時には元気過ぎて注意をしたり、喧嘩をすることもありますが、そこがまたいいところでもあります。楽しいことや大変なこと、辛いこともたくさんありますが、子どもたちの元気な笑顔を見ることが、何よりのやりがいです。

Q：最後に一言どうぞ

ゆうりんに就職をして、4年目になりました。任せてもらう仕事も段々と増えてきました。大変だなと思う一方で、子どもたちとの関わりはとても楽しいと感じています。悩みもありますが、他職員さんに相談すると親身に聞いてくれて、色々とアドバイスをくれてとても助かります。僕自身、ネガティブよりポジティブに考えていきたい性格なので、これからもこの仕事を楽しく、やりがいをもっていきたいなと思っています。

ほだか　川池　弥生

Q:ほだかでパート職員として働こうと思ったきっかけ、動機を教えてください

学生の頃から養護施設で働くことは選択肢のひとつでした。働くきっかけとなったのは、我が家の３人の子ども達と通い続けた自主保育グループ（小学校就学前まで保護者達が主軸となって運営し保育活動する団体）での活動が末息子の卒室と同時に終わり、そこで得た経験（主に外活動！）を活かせるかもしれないと思い応募に至りました。

Q：ほだかで働いていてよかったことは？

〝丁寧に人と向き合う〟ということが、対子ども達にも、対職員（パート職員、ボランティア職員含む）同士にもあって、人と繋がることの意義を感じられるところです。来年度からの新規予定事業である妊産婦等生活援助事業においても、ほだかの良さを活かしつつ援助を求める声を拾い上げ、手と手が繋がるような環境をつくっていけたらと思っています。

Q：ほだかのここが好き！を教えてください

ユニット内でも事務所でも「〇〇くん（ちゃん）が、こんなこと出来るようになったよ！」「〇〇ちゃん（くん）があんなこと言っていたよ！」といった、ほだかの子ども達のエピソードを皆で分かち合い喜び合う姿が頻繁になり、子ども達の成長を温かく見守るハートフルなところがとても好きです。

Q：子どもとのおもしろ（楽しい）エピソードを教えてください

むしろ反省エピソードなのですが…
ミニ里親としてほだかの男の子（２歳）と家庭体験としての交流をしていますが、先日の家庭体験時には夫（※高校卒業まで兵庫県で育つ）の関西弁レッスンに必死に食らいつき、「なんでやねん！」「ほんまや！」「ええねん！」「まいど！」を上手に使いこなせるようになりました。がしかし、横断歩道を渡っている時に夫が「信号機の赤は〝あかん〟の赤やで。」と間違った言い方を伝え、それから赤の信号機を見つけると「あかん！」と言うように…。早く「止まれ」に直ってくれますように。

Q：休日はどのように過ごしていますか

息子たちの野球事に約10年休日を費やしてきましたが、先日とうとう夏大会が終わり引退したので、心にぽっかり穴が空いてしまったような感覚です。とりあえず言い訳ばかりしていた家の片付けから始めようと思います…。

Q：趣味や特技があれば教えてください

絵画（特に油絵）は描くのも観るのも好きです。20代の頃にワーキングホリデーでカナダに渡航し、その後ヨーロッパをメインにひとり旅をし、美術館に足繁く通い、時間が経つのも忘れて一日中過ごした時もありました。一番印象に残っている、バルセロナのピカソ美術館内に展示されていたピカソの若い頃の作品は言葉にならないほどの衝撃を受けました。また、いつか観に行きたいです。

Q：最後に一言どうぞ

ほだかの職員さんは、話せば話すほど面白い一面がある方達なので、いつも賑やかで楽しい雰囲気に包まれていますしパート職員さん達もこれまたパワフルで明るい面々なので現場は活気があり、笑顔に溢れています！

子どもに寄り添う支援とその難しさ

中央有鄰学院 元職員　福安 瑤子

私が入職したのは14年ほど前。中央有鄰学院が大舎から小舎へ建て替えを行い、乳児院ほだかが新設された年でした。ゆうりんの小舎では6～8人の子どもたちが家庭に近い環境で生活することが出来るようになりました。また乳児院が併設されたことで、乳児院から他の児童養護施設への分離経験がなくなり、子どもの育ちをそのまま繋いでいくことが出来るようになりました。ゆうりんで9年間勤め、産休と育休を取得し、その後ほだかへ異動し4年間お仕事をさせていただきましたが、この14年間で、生い立ちの整理の大切さと支援の難しさを考える機会が何度もありました。

子ども達の言葉や行動の背景には様々な思いや考えがあります。職員にとっては困った行動に見えても、子どもなりの意見や思いがあったり、その行動でしか表現できなかったりと背景は様々です。子どもの話を聴き、行動の背景を考え、困った行動を適切な行動で出していけるように関わっていくことが大切であると感じました。子どもの話を聴きながら、「駄目と言われた」「どうせ言っても叶わない、仕方ない」と子どもが大人に対して不信感を重ねていかないように現実的に可能な部分と難しい部分を説明し、子どもも職員も納得できるような方法を見つけていけると良いと感じます。

ただ、私はその対応がとても苦手で、何度も先輩職員に助けてもらっていました。子どもの意見を聴くことまでは出来ても、その背景を読み取ること、子どもと話し合って方法を見つける所までとことん突き詰めることが出来ませんでした。どのような方法があるのか、どのように話を進めていけば子どもも職員も落ち着いて話し合いが出来るのかという知識と経験が足りなかったのだと思います。『子どもの気持ちに寄り添う』と一言でいっても、子どもの意見を全て聴く、共感・傾聴だけすることが『寄り添う』ことにはならないこと、気持ちには寄り添いつつ、適切な方法を考えていけるよう職員も子どもと一緒に悩んでいく事が子ども達にとって必要な経験なのだと学びました。ほだかでも同じように、子どもの甘えの受け止めと発達の支援の部分で関わりの難しさを感じました。子どもの甘えをたくさん受け止めてあげたい気持ち、でも年齢に合った発達も促していきたい職員としての視点で、私はつい手を出しすぎてしまっていました。甘えを全て受け止めることが子どもの為にならないこともある、甘えと甘やかしの線引きは今でも難しいなと感じています。職員としての意識と知識を持って、本当の意味で子どもに寄り添う支援が出来るようになりたいと今後も私の課題になると思います。

先日、卒院した担当児へ退職の旨を伝えた際、「自分の人生の分岐点にはいつもいてくれた」「厳しく優しく接してくれてありがとう」とメッセージをもらいました。この担当児とは本当にたくさんぶつかって、他の職員の方に何度も間に入ってもらいながら、初めて卒院を見送った子どもでした。当時は、大事な節目の時期の担当職員が私なんかで良かったのかと何度も悩んだり、迷ったりすることがありました。その子も思春期や生い立ちの整理、自立を前にたくさん思うことがあったと思います。それでも今このような言葉をもらえて、14年間続けてきてよかった、子どもの節目に少しでも関われて良かったと心の底から思います。

子ども達と日々関わる中で、施設職員は大変なことや辛いと感じることも多いと思います。それでも職員が長く続けること、同じ人が同じ場所にいてくれることが子どもたちにとっては何よりの安心になると思います。これからも中央有鄰学院が子どもたちにとって、帰ってきたい実家のような存在であり続けられるよう、職員の方々のご活躍をお祈りしております。

令和５年度　社会福祉法人中央有鄰学院　決算会計報告

勘定科目			法人本部	児童養護施設 ゆうりん	乳児院 ほだか	自立援助ホーム きょうわ	ヘルパーステーション ゆうりん	収益事業	合計
事業活動による収支	収入	介護保険事業収入	0	0	0	0	0	0	0
		児童福祉事業収入	0	452,124,325	253,070,615	46,958,023	0	0	752,152,963
		借入金利息補助金収入	0	383,136	152,740	0	0	0	535,876
		経常経費寄付金収入	3,983,505	3,851,114	552,988	125,657	0	0	8,513,264
		受取利息配当金収入	507	402	1,918	97	0	0	2,924
		その他の収入	407,650	8,969,086	6,361,306	1,102,839	0	0	16,840,881
		生活事業収入	0	0	0	0	0	0	0
		事業活動収入計	4,391,662	465,328,063	260,139,567	48,186,616	0	0	778,045,908
	支出	人件費支出	7,118,206	328,590,791	205,112,471	35,260,809	0	0	576,082,277
		事業費支出	1,080,000	61,902,486	14,973,037	7,662,932	0	0	85,618,455
		事務費支出	1,133,951	43,257,710	15,106,021	5,010,196	0	0	64,507,878
		支払利息支出	109,063	479,048	191,009	0	0	0	779,120
		その他の支出	0	0	0	0	0	0	0
		事業活動支出計	9,441,220	434,230,035	235,382,538	47,933,937	0	0	726,987,730
	事業活動資金収支差額		▲ 5,049,558	31,098,028	24,757,029	252,679	0	0	51,058,178
施設整備等による収支	収入	施設整備等補助金収入	0	6,700,800	1,865,600	0	0	0	8,566,400
		施設整備等寄付金収入	0	0	0	0	0	0	0
		設備資金借入金収入	0	0	0	0	0	0	0
		固定資産売却収入	0	0	0	0	0	0	0
		施設設備等収入計	0	6,700,800	1,865,600	0	0	0	8,566,400
	支出	設備資金借入金元金償還支出	1,092,000	8,376,000	2,332,000	0	0	0	11,800,000
		固定資産取得支出	0	74,491,018	5,841,270	253,000	0	0	80,585,288
		固定資産除却・廃棄支出	0	0	0	0	0	0	0
		ファイナンスリース債務の返済支出	0	0	0	0	0	0	0
		その他の施設整備等による支出	0	0	0	0	0	0	0
		施設整備等支出計	1,092,000	82,867,018	8,173,270	253,000	0	0	92,385,288
	施設整備等資金収支差額		▲ 1,092,000	▲ 76,166,218	▲ 6,307,670	▲ 253,000	0	0	▲ 83,818,888
その他の活動による収	収入	長期運営資金借入金元金償還寄付金収入	0	0	0	0	0	0	0
		積立資産取崩収入	0	390,600	111,600	0	0	0	502,200
		拠点区分間繰入金収入	4,954,206	50,000,000	0	0	0	0	54,954,206
		その他の活動による収入	0	0	0	0	0	0	0
		その他の活動収入計	4,954,206	50,390,600	111,600	0	0	0	55,456,406
	支出	長期運営資金借入金元金償還支出	0	0	0	0	0	0	0
		積立資産支出	0	0	0	0	0	0	0
		拠点区分間繰入金支出	0	3,208,230	51,745,976	0	0	0	54,954,206
		その他の活動による支出	0	0	0	0	0	0	0
		その他の活動支出計	0	3,208,230	51,745,976	0	0	0	54,954,206
	その他の活動資金収支差額		4,954,206	47,182,370	▲ 51,634,376	0	0	0	502,200
当期資金収支差額合計			▲ 1,187,352	2,114,180	▲ 33,185,017	▲ 321	0	0	▲ 32,258,510
前期末支払資金残高			25,251,695	58,309,018	53,323,391	12,225,490	2,975,924	9,458,467	161,543,985
当期末支払資金残高			24,064,343	60,423,198	20,138,374	12,225,169	2,975,924	9,458,467	129,285,475

児童養護施設ゆうりんは、本園と地域小規模を合算した金額です。（定員本園27名+地域小規模6名×4箇所 合計51名）

５箇所目となる、地域小規模児童養護施設の整備費として、乳児院ほだかより5,000万円の資金移動（拠点区分間繰入金収入・支出）を致しました。令和６年４月より、本園定員を27名から21名に縮小し、新たに、地域小規模児童養護施設　のぞみ（定員6名）を開設させていただきました。また、令和5年度は、「地域小規模児童養護施設等バックアップ職員」の加算（正職１名）がありました。このように、本園の縮小、地域への分散化が進み、児童の養育環境が改善されていく一方で、各地域小規模が孤立化しないよう、より一層、職員間の連携・情報共有が重要な課題となっていきます。

乳児院　ほだかは、ふれあいセンターおおだか（地域子育て支援拠点事業）、ほだかの里（名古屋市里親養育包括支援機関モデル事業）を合算した金額です。ヘルパーステーションゆうりん（老人居宅介護等事業）、収益事業（高齢者生活支援事業）は、令和４年度末をもって廃止致しました。

多くの皆様のご支援により、法人全体として約850万円の寄附金収入を計上する事が出来ました。心より感謝申し上げます。（安達）

ご支援ありがとうございました

令和６年４月１日から令和６年8月31日までに、寄付・寄贈・招待・ボランティア活動にご協力いただきました方々のご紹介をさせていただきます。紙面の都合上内容は省略させていただきます。（順不同・敬称略）

【個人】

崎山智子　山口ミツノ　早川富雄　林享　松沼康隆　門司一徹　林千愛　半場美希　松山信一　杉治夫 榎本卓純
佐藤孝介　吉岡菜緒子　下野哲也　堀部志保　岩田佐奈　山口裕司　山﨑和代　田畑豊子　加藤隆子　田中尚己
近藤雅裕　金田和久　瀬川卓也　北中一郎　中山鈴香　志賀敦夫　加藤幸男　山本由紀　上條豊　久野すみ子
本田和也　中川のどか　佐藤広　ao　赤木まどか　山口薫　藤原智栄　梶野弘　石井祐治　吉田玲子　佐伯誠
柳谷真智子　谷川修　吉住隆弘　小田義信　土居万里子　中島一樹　今南順子　持橋いくよ　倉知清和　城下奈緒
高橋栄次　小島啓　南澤誠　櫻井碧　竹田登志也　西田かおり　鷲見千尋　福嶋俊郎　矢守信昭　柴橋佳幸
伊藤吟子　山見由紀子　紙屋裕安　松井真由　山田宏巳 鈴木知己　藤井正和　藤井恭祐　前川智耶　小川聖平
塚田兼司　水口秀介　サワザキタツヨシ　森博史　日野風花　猪俣憲一　高島隼人　山野辺仁　加藤邦彦　鈴木都
倉谷義成　岡田裕介　石川智　小竹日十美　渡辺征大　渡辺大生　匿名

【団体】

いなば食品　Daska&Desiree　名古屋食糧　名古屋キワニスクラブ　ハウス食品グループ　トヨタホーム愛知
コカ・コーラボトラーズジャパン　豊明損保センター　東海アイスクリーム協会　鮪一　トヨタシステムズ
ヒルズウォーク徳重ガーデンズ　ホーユー　ファミリーマートフードドライブ　大垣共立銀行　中部トーハン会
KADOKAWA　はりきゅう治療院クロエ　文屋　The Music Restaurant　ライズフーズ　イトウ　brarist
お陽様農園　尾州商会　Nordic sleep Japan　南生協病院居宅介護事業所　パスタディフランコ　ユウシン
イシダ総合システム　親切会中部支部　ワイドワン　ユーエージェント　ネットプランニング　オーアンドケー
グループエスカラデー本部　愛知県信用農業協同組合連合会　明治ホールディングス　南大高町内地区長
愛知県トラック協会　ソロピッツアナポレターナ　山銀ぶどう園　tsumugusewingroom　エッチアイ技研
中央有鄰学院ひとりひとりを支える会　ニッセツ アジャスト　居酒屋八重 霊友会「ありがとうごだま基金」
シュリンプ　アートワークス　中京大遊びグループ　ぐるーん　名古屋グランパス後援会　トヨタ自動車 ＩＣＤＳ
世界アーチング協会　名古屋名南ライオンズクラブ　名古屋ウエストライオンズクラブ　中部善意銀行
名古屋市社会的養育施設協議会　トヨタモビリティパーツ労働組合　名古屋市　名古屋市立大学　丸美産業
日本ゼネラルフード　名古屋住友クラブ　NTPグループ　グループエスカラデー　名古屋南ロータリークラブ
Dog Salon&Hotel　COCONA　中日新聞社会事業団　白水運輸　夢シート　鳴海教会　名古屋中日会
中日本興業　名古屋グランパスエイト　児童福祉の架け橋　餃子の王将豊明店

Instagram

COLUMN　～未来を生きる～

先日また新しいスマホが発表されて「今度はAIが搭載されるらしいよ！」と話題になっていました。私もかつては新しいスマホの発売日に胸をときめかせながら行列を作っていた一人です。それが「未来を生きる」ことだと思っていました。

しかし、ふと考えることがあります。これからどれだけ先になるか分かりませんが、人類はテクノロジーや利便性を求める生き方にいつか区切りをつける時がくるんじゃないかと…。もし仮に人類がそのような区切りをつけた時、人間社会は一体どうなっているでしょうか。それは、いつ来るか分からない遠い未来の話でしょうか。
いいえ。それは、今すぐに始められる未来だと、私は思っています。

例えば、エスカレーターやエレベーターではなく、あえて階段を使うこと。今あるものを永く大切に使うこと。空腹を“楽しむ”こと。まずは何でも自分でやってみる、作ってみる、直してみる。そんな日常を子どもと一緒に楽しみ、学びに繋げていくこと‥。

「未来を生きる」というのは、最新のスマホや家電、自動車を手に入れて、今よりもさらに便利で快適な生活を送るということだけではなく、人間に備わっている（持て余している!?）機能にしっかり向き合って、その経験と知恵を子どもたちにちゃんと伝えていくということでもあるのかなと思っています。　（宗吉）